

母子分離場面における12か月の行動

— 妊娠末期および産後12か月時の母親の神経症的傾向との関連での検討 —

兼子和彦、大野マチ子、馬場テツ(葛飾赤十字産院)

水上啓子 国立小児病院小児医療研究センター

<はじめに>

我々は、前回までに妊娠中の精神的要因の、産科経過や出生した児の新生児行動におよぼす影響についてを検討し本研究班で報告してきた。今回は、母親の妊娠末期および産後一年時の神経症的傾向と生後12か月児のストレス場面での行動の関係を母子分離場面を設定して検討した。

<対象母子>

妊娠初期より葛飾赤十字産院において定期診察を受け1983年11月から1984年6月迄のあいだに当院で分娩に至った者24名であり、児については前述の母親よりAPGAR SCORE 8点以上の正期産、経腔自然分娩により出生したAFD児で、実験時点で満12か月の男児18名、女児6名の計24名である。出生順位は全員第一子。

<調査実験方法>

1) 対象母子の設定:妊娠第8か月時に葛飾赤十字産院の母親学級でCORNELL MEDICAL INDEX(以下略してCMI)に回答している母親の中から、その結果にもとづいて、母親の神経症的傾向の各レベルの例数がほぼ同数になるように選び出し、研究協力を依頼した。CMI評価には4領域があり(図1)、領域1はCMI Iとよばれ「心理的に正常なもの」、領域2はCMI IIとよばれ「心理的にほぼ正常なもの」、領域3はCMI IIIとよばれ「神経症的傾向とみなしうるもの」、領域4はCMI IVとよばれ「神経症のもの」とそれぞれ評価される。研究協力が得られた母子はCMI I 10組、CMI II 6組、CMI III 7組、但し、CMI IVについては該当者なし。

母親の産後12か月時の神経症的傾向の評価も

CMIで行い、母子分離実験の前に実施した。

2) 母子分離実験:実験室の設定は図2に示す。VTRカメラおよび実験者(3名)はカーテンの蔭に位置する。実験は表1に示す4つのエピソードについてなされ、VTRで記録する。

3) 反応の評定:記録したテープを表2に挙げた3エピソード27の行動項目について、生起を2件法で評定した。なお、エピソードのaの6項目は、母親に対しての定位行動を現わす項目であり、bの6項目は、母親不在に対する自己鎮静行動項目である。エピソードは、ストレンジャーに対する児の反応を見る項目であり、ストレンジャーに対する拒否的反応に関する3項目、積極的反応に関するもの3項目からなる。エピソードは、帰って来た母親に対する反応を見る8項目である。なお、評定は、2名の評定者により行われた。

<結果>

1) 母親のCMIの変化について

妊娠第8か月時に高かった母親の神経症的傾向は産後12か月時には低まる傾向にあった。すなわち、妊娠末期にCMI IIIと評価された7名のうち、5名がCMI IIないしはCMI Iに変化しており、またCMI IIと評価された7名についても3名がCMI Iに変化した。またCMI Iと評価された10名については全員CMI Iのままであった。その結果、産後12か月時でCMI IIIと評価されたものは2名、CMI IIと評価されたものは6名CMI Iと評価されたものは16名であった(表3)。

2) 母親の妊娠第8か月時の神経症的傾向と母分離場面での児の行動との関係

推計学的には有意な差はみられなかったが、表4に挙げたような項目については、反応の表われ方がCMI評価と相関する傾向が見られた。CMI評価が高まるにつれて、エピソードでの「泣声(単発)」「泣き顔」「泣き叫び」が多くなり、一方、CMI評価が低まるにつれて、「泣声」や「泣き叫び」は減少し、その代わりに、「げんな顔をして辺りを見回す」が多かった。

3) 母親の産後12か月時の神経症的傾向と母子分離場面での児の行動との関係

妊娠第8か月時の関係と同様推計学的には有意な結果は見られなかった。しかし、産後12か月時では、CMIと評価されたものが極端に減少し、2名となってしまったことから詳しい検討は差し控えた。

4) 母親のCMI変化(妊娠第8月時-産後12か月時)と母子分離場面での児の行動との関係

エピソードの「げんな顔をする」「辺りを見回す」「泣き叫び」、エピソードの「ストレンジャーに差し出された玩具を受け取る」にCMI変化群と変化しない群で有意差がみられた。なお、母子の再会場面に関する項目では2群に有意差はみられなかった。また、有意とは言えなかったものの、「柵などいじる」「玩具を投げる」「ストレンジャーに対して笑う」などはCMIが変わらない群では見られることはあっても、CMI変化群ではほとんど、あるいは全く見られなかった(表5)。すなわち、CMI変化群では、独りにされたときに、辺りを見回している余裕がなく、泣き叫ぶ反応が見られ、また、見知らぬ他人が差し出す玩具を受け取らない子が多くみられ、一方CMIが変化しない群では、母親を捜す様子をし、単発的な泣声は挙げるものの、柵をいじったり、玩具を床に投げたりして3分間を過ごすものが多く、見知らぬ人が差し出す玩具については、受け取ったり笑ったりした児もみられた。

5) 児の性差と母子分離場面での児の行動との関係

性差と児の行動の間には推計学的には有意な差は見られなかった。しかし、有意差はないものの、「泣き叫び」において、男児は18人中7人が泣き叫んだのに対して、女児は6人中5人が泣き叫んでおり、女児の方が母子分離場面で泣き叫びやすい傾向がみられた。

<考察>

以上の結果から次のようなことが考察された。

- a) 妊娠中に神経症的傾向をみとめた母親でも出産、育児を経験する過程で神経症的傾向が消える場合が多い。
- b) 母子分離時の泣き叫びは、単に児の母親に対する愛着の高さを表わすものではなく、児の自己鎮静の低さ、アップセット状態へのなりやすさと捉えることが可能である。
- c) 妊娠、出産、育児等の身体的、環境的变化に伴って神経症的傾向を示したり示さなかったりするようなパーソナリティに一貫性を欠く母親の児は、ストレスの高い状況では、一貫した母親の児よりパニックに陥りやすい傾向を示す。
- d) 母子分離時の反応行動の性差に関しては、今回の実験は被験児の男女比に大きな偏りがあったので更に実験を行い男女数を同じにして検討する必要があると考えられた。

<結論>

児の行動発達には複雑な要因が絡んでおり短絡的に結論を出すことは控えねばならないが、少なくとも児の適応的な行動の発達には母親のパーソナリティの安定が大きく関係している事が本研究より示唆された。

図1 神経症判別図

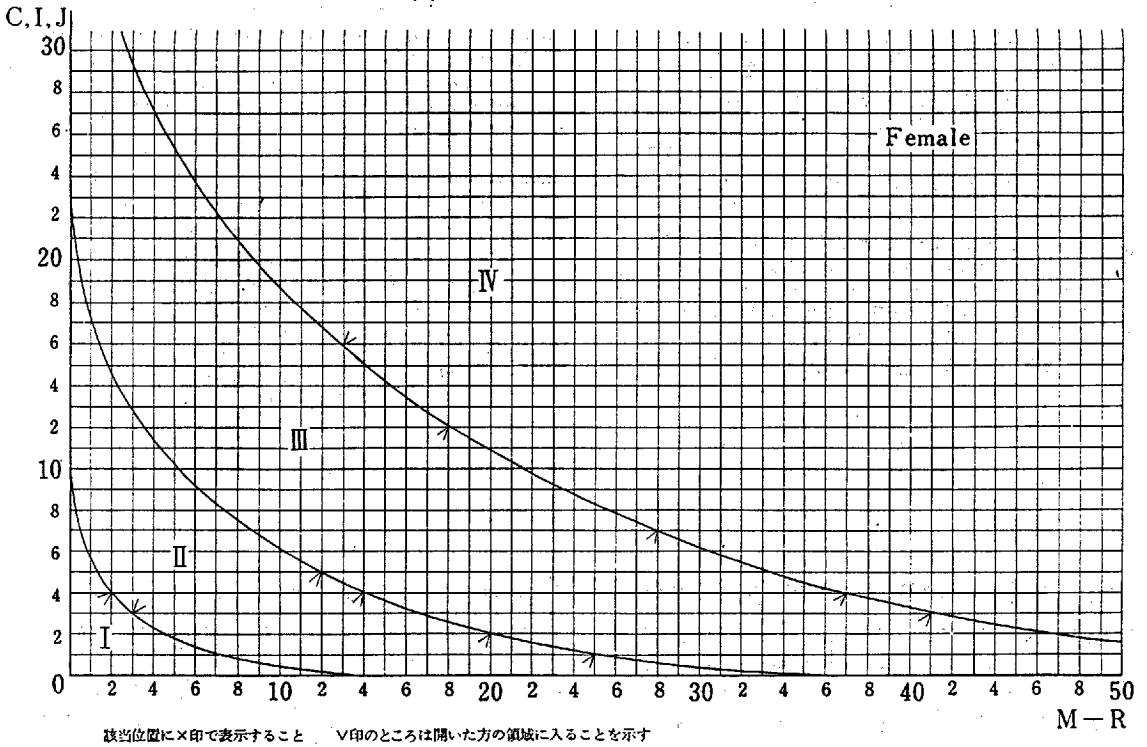


図2 実験室の設定

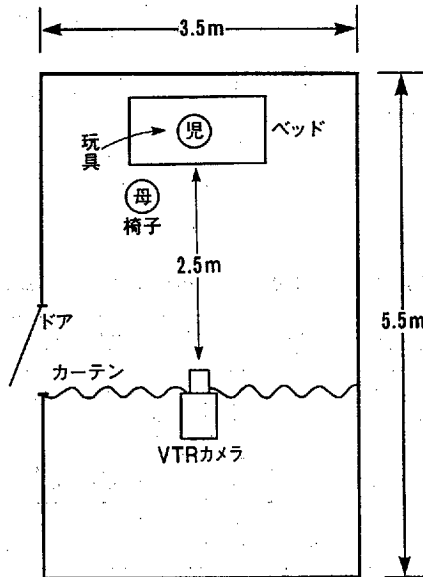


表1 実験エピソード

エピソード	時間(分)	概要
I	5	母児入室。児はベッドの上、母親はベッドサイドの椅子に腰かけた状態で遊ぶ。
II	3	母親が退室し、児はベッドに独りで置かれる。
III	2	STRANGER(男性)が入室し、児への声かけ、玩具の手渡しを行なう。児が泣いている時には抱きを試みる。
IV	3	STRANGERの退室とすれ違いに母親が再入室し、児をあやす。児が泣いている時は抱いてもらう。

注) エピソードII及びIIIにおいて、児のdistressが強い時は、短縮可。

表2 各エピソードとチェック項目(27項目)

(エピソードIIにおける児の行動) (エピソードIIIにおける児のStrangerへの行動)

- a. 母親に対する定位行動
- ・ドアを見る
 - ・怪訝な顔をする
 - ・あたりを見まわす
 - ・呼びかけ
 - ・泣き声、泣き顔(単発)
 - ・泣き叫び
- b. 母親不在に対する自己鎮静行動
- ・玩具を握る
 - ・玩具・欄などをなめる
 - ・玩具、本などを見る
 - ・欄などをいじる
 - ・指吸い
 - ・玩具を投げる
- (Strangerが差し出した玩具を受け取らない)
- ・Strangerが差し出した手を無視する
 - ・抱かれても泣き止まない(身体を歪ませない)
 - ・逃げる
 - ・笑う
- (Strangerが差し出した玩具を受け取る)
- ・Strangerが居なくなると泣く
- (エピソードIVにおける児の母親への行動)
- ・母親を見ただけで笑う
 - ・声かけ・タッチで泣き止む
 - ・抱っこを差し出す
 - ・抱かれて初めて泣き止む
 - ・抱かれても時々泣く
 - ・母親の胸に顔を覆りつける
 - ・母親にあやされて笑う
 - ・母親に怒りをぶつける

表3 妊娠第8月時と産後12ヶ月時のCMIの変化

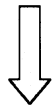
妊娠第8月時のCMI \ 産後12ヶ月時のCMI	I	II	III	妊娠第8月時のCMI
I	10	0	0	10
II	3	4	0	7
III	3	2	2	7
産後12ヶ月時のCMI	16	6	2	計24

表4 妊娠第8月時のCMIと母子分離時の児の行動特徴

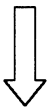
項目別CMI	怪訝な顔をする	あたりを見まわす	泣き声、泣き顔(単発)	泣き叫び	Strangerが差し出した手を無視する	(Strangerから)逃げる	(Strangerに対して)笑う
I	10/10 (100%)	9/10 (90%)	3/10 (30%)	3/10 (30%)	5/10 (50%)	5/10 (50%)	4/10 (40%)
II	8/7 (87.5%)	4/7 (57.1%)	5/7 (71.4%)	4/7 (57.1%)	2/7 (28.6%)	0/7 (0%)	1/7 (14.3%)
III	4/7 (57.1%)	3/7 (42.9%)	5/7 (71.4%)	5/7 (71.4%)	0/7 (0%)	0/7 (0%)	0/7 (0%)

表5 母親のCMIの変化と母子分離時の児の行動特徴

母親のCMI	怪訝な顔をする	あたりを見まわす	泣き叫び	欄などをいじる	玩具を投げる	Strangerに笑う	Strangerの玩具を受け取る
CMI変化群	4/8 (50%)	2/8 (25%)	7/8 (87.5%)	1/8 (12.5%)	0/8 (0%)	0/8 (0%)	0/8 (0%)
CMI不変群	16/18 (100%)	14/18 (87.5%)	5/18 (31.3%)	10/18 (62.5%)	5/18 (31.5%)	5/18 (31.5%)	8/18 (50%)
χ^2 検定	6.3375 (P<.02)	6.773 (P<.01)	4.9875 (P<.06)				3.981 (P<.05)



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



はじめに

我々は、前回までに妊娠中の精神的要因の、産科経過や出生した児の新生児行動におよぼす影響についてを検討し本研究班で報告してきた。今回は、母親の妊娠末期および産後一年時の神経症的傾向と生後 12 か月児のストレス場面での行動の関係を母子分離場面を設定して検討した。